

死者と生者の間に④

「遺体にこだわらない文化」はないと言われます。アメリカのエンバーミングについては、藤井正雄氏の『骨のフォークロア』によれば、「(アメリカ人にとって) 死者から死の苦痛・汚れを隠ぺいして、あたかも眠っているが如き錯覚を遺族に懐かせるのであり、死の否定・生の偽装のパフォーマンスである」ということです。この錯覚は「メモリー・ヒクヤアー(思い出のひとこま)」と呼ばれているものでした。また、インドネシアに住むダヤク族は、高い地位の者が死ぬと、その死体はすぐに処理されるのではなく、死体が腐敗し、骨となり、その骨が乾いた状態になったあとで「本葬」を行います。死者に捧げられる祭りである本葬にいたる長い時間、人々はそこに至るプロセスに重要性を見出し、本葬に集まることによって、死者が祖先と一緒にいることを確認し、自分達もやがて、その祖先たちと一緒になれると信じているからでした。日本にもある「洗骨」という二次葬では、死後5年後に掘り返した遺体を洗い、清められた骨が埋め戻されます。

死者への思い

前回概述した、それぞれの社会が持つ「死の文化」を「儀礼中心の死の文化」と「言語表現による死の文化」とに二別できるならば、前者はいわゆる「伝統的社会」に特徴的で、後者は近代化が進んだ先進国で発達しているとされます。波平恵美子さんは、他の仏教国に比べ、日本の葬儀、とくに告別式を済ませたあとでも、「初七日」や「四十九日」をはじめとする法要が幾度も続くことが日本の特徴であることを指摘しています(波平恵美子『病と死の文化 現代医療の人類学』朝日新聞社参照)。

ある特定の個人が死者となり、その死者のために、死のあとでたびたび縁者が集まる。そのような行動様態について、ダヤク族の葬儀を研究したロバール・エルツは、遺体の取り扱いの様式が、その社会の信仰体系だけではなく、社会組織や価値体系などかわると述べます。これにしたがえば、死後に何回も死者のために集まるということに、ある地域のある家族の成員であるという帰属意識だけではなく、その社会やそれを構成する人々が受け継いで来た価値体系が現れていると考えられます。

仏教の開祖ブッダは、自らの死に際して、“私の肉体にこだわらな”と言ったと伝えられています。仏教と同根と言えるヒンドゥー教徒は、火葬した遺灰を川や池などに流して墓を設けることはありません。輪廻転生あるいは生まれかわりを信じているとしても、日本で受容された仏教は、日本的な発展をし、日本人の死生観を反映しながら、死や死者と対面してきたということになります。沖縄などでよく見られた洗骨では、33回忌を最後として、白装束をまとった遺族が踊りながら練り歩く「天上市」という儀式を行いました。死者を「カミ」に昇天させるための踊りです。その後は仏壇ではなく神棚に死者は祭られるということからも、「天上市」を機に、死者はみずからの個性を失って、「カミ」になっていくことが窺われます。この「カミ」は祖霊や祖先の性格を保持していると思われ、その後も縁のある生者を見守り、援助していると考えられることもできます。

神葬祭では、50年祭を営むこともありますから、日本人は故人の死後、何回もの集まりをもちながら、家族や血縁者また

縁のある人々とのつながりや共有する価値観を継承してきたのかもしれませんが。長い時間の流れのなか、定期的に行われる死者への儀礼(法要や年祭)は、共同の空間と時間を共有し儀礼を行うことによって、人間と社会とのつながりを実証してきたと考えてよいのではないかと思います。

しかしながら、こうした習俗や慣習は、社会の在り方とともに変化してきたものでもあります。葬送儀礼に業者が参入している欧米や日本では、そうした儀礼の在り方そのものが社会の変化を反映していると同時に、変化した儀礼の在り方が社会における人間の在り方に還元していると思われる点もありそうです。

1996年ミシェル・ヴォヴェルの『死の歴史 死はどのように受け入れられてきたのか』を紹介した監修者の池上俊一氏は、次のように述べました。

多くの人々に本書を眺めてほしいのは、現在、「死の歴史」を知ることがわれわれにとって必要不可欠だと考えたからだ。今や死の影も死者の存在も、身のまわりからほとんど消えてしまっている。病人は死に場所としての病院に追いやられ、商品化が進んだ葬儀は、きわめて機械的なものとなっている。死はほとんど存在しないかのように、あるいは売買される商品のひとつに過ぎないように思なされている(ミシェル・ヴォヴェル著、池上俊一監修『死の歴史 死はどのように受け入れられてきたのか』創元社、pp.1-2)。

池上氏は、そうした状況を「死体のモノ化」としてとられると、その「モノ化」は「生きている人間をもモノ化しているような不安感を生み、生と死の世界を往復して保っている人類全体の生命の自然の連続性に、人工的異物が挟まれて歯車が狂わされ、循環が途絶えてしまうかに思われる」ということが、不可逆的に進んでいると池上氏が感じている「脳死・臓器移植」に対する「気持ち悪さ」の説明としています。彼は「死体の危機はまさに生の危機」であるからこそ、「死の歴史」を学ぶのがよいと述べています(同書、p.2)。

日本の民俗研究をしてきた板橋春夫氏も同様の懸念を述べています。板橋氏の『生死 いきしに』(「いのちの民俗学3、社会評論社、2010」)の副題には「看取りと臨終の民俗/ゆらぐ伝統的生命観」が付されています。主に、誕生(出産)と葬送についての民俗調査を通し、先立つ人から教わってきた「死」の現実、現在の日本では失われつつあると彼は実感します。そうした現代の様相について、「天下泰平になれて、生死の意義を忘れた人それぞれが、恐ろしいことを平気でしてのけるようになった」という池波正太郎氏の小説の言葉を冒頭部分で引用しました。これは生と死とが乖離しているということを意味しているようにも、「モノ化」される人間に充当するようにも思います。

生と死について「生の背後に死があり、死の中で生きている関係」と捉える板橋氏は、死を考えるのに死者本人に関する儀礼習俗だけではなく、「残された家族をはじめとする周囲の人々の心の動きや行動なども調査研究の対象として取り込む必要がある」(p.26)と考えて、各地の事例研究を進めてきました。だからこそ、生死の習俗・儀礼を今こそ再考する必要があると言っています。